

15 世紀，朝鮮が琉球に送った仏典

―世祖の刊経事業との関連―

佐 藤 厚*

1. はじめに―琉球国は…三韓の秀を鍾^{あつ}む

現在，日本が抱える問題の一つに沖縄県の米軍普天間基地移設問題がある。時折，テレビで沖縄県知事と日本政府関係者との会談の様子が映し出されるが，その背景に漢文が書かれた屏風がある。それは「万国津梁の鐘」と呼ばれる鐘に彫られた銘文である。この鐘は1458年，当時，琉球を統治していた尚泰久王が鑄造させ首里城正殿に掲げていたものである。「万国津梁」とは海運により周辺諸国をつないでいた琉球を表す言葉である。それは次の言葉から始まる。

琉球国者南海勝地，而鍾三韓之秀。以大明為輔車，以日域為唇齒在，此二中間湧出之蓬萊嶋也，以舟楫為万国之津梁，異產至宝充滿十方利。

琉球国は南海の勝地にして，三韓の秀を鍾^{あつ}む。大明を以て輔車となし，日域を以て唇齒となす。此の二者の中間に在りて湧出する所の蓬萊島なり。

すなわち琉球は南海の勝地であり，三韓すなわち朝鮮のすばらしいものを集めたところであるという。そして明国を輔車とし，日本を唇齒とするという。輔車も唇齒も，片方が欠けては存在しないものを例える言葉である。

*専修大学ネットワーク情報学部特任教授

そして琉球は二者すなわち明国と日本の中間にあって湧き出た蓬莱島であるという。

ここで冒頭に朝鮮が強調されていることが注意される。なぜ朝鮮半島なのか。そもそも高麗時代末から朝鮮時代にかけて行われた朝鮮と琉球との交流の中、15世紀は両者の関係の「黄金時代」と呼ばれるほど活発な時代であった¹。中でも15世紀後半は両国に奉仏の王が出たのである。朝鮮王朝は第7代の世祖（在位1455-1468）であり、琉球の王は尚泰久（在位1454-1460）、尚徳王（在位1461-1469）である。すなわち「三韓の秀」とはこの時代の仏教交流を意味すると考えられている²。

この時は、儒教を貴び仏教を抑圧した、いわゆる「崇儒抑仏」の朝鮮王朝にあって、最も崇仏の念が強かった王として知られる。そして世祖は大蔵経を日本や琉球に送っていることで知られている³。

2. 問題の所在

世祖は大蔵経のほかに、日本、琉球に多くの仏典を送っている。特に本論で中心として扱うのは1467年（成化3年）に世祖が琉球に送った27種の仏典である。その中には『法華経』、『円覚経』、『楞嚴経』といった経典、『楞伽経疏』、『阿弥陀経疏』といった経典の注釈書、『起信論』など大乘仏教の論書、『高峯和尚禅要』、『永嘉集』、『証道歌』といった禅宗文献の名前が入っている。

筆者はこのリストに関心を持った。それは、第一に朝鮮仏教の海外伝播という意味を持つからである。前述したように、朝鮮王朝は大蔵経を日本や琉球に送っているが、大蔵経は仏典のまとまりであるから仏教思想の伝播とは言い難い。それに対して今挙げた仏典は、個々の思想を帯びた典籍である。その多くは中国成立文献であるが、それらの多くは世祖が重視し

刊行したものであるから、広い意味では朝鮮仏教の海外伝播と言えると考ええる。このことからこれらの文献の研究は、朝鮮時代の仏教を新たな視角から捉える端緒になると考えられる。

第二にそれらが日本だけでなく琉球にも送られたということである。朝鮮時代の海外との仏教交流では、朝鮮と日本との関連は比較的知られているが、琉球はあまり知られていない。ここで朝鮮が琉球に多くの仏教典籍を送ったという事実注目したい。残念なことに現在、朝鮮から送られた典籍は残っていないようである。しかし、仏教を通した朝鮮と琉球との関係に着目することは沖縄の文化史を考える上でも重要なことである。

朝鮮と琉球との間の文物の交流についてはすでに研究があり、その中でも仏典についての言及がある⁴。しかし仏典の具体的な内容や性格についての研究は十分になされていない⁵。ここでは、その中でも仏教思想の立場から検討した先行研究を挙げる。馬場久幸〔2014〕「『高麗再雕大蔵経』の日本流通と活用—琉球国を中心として—」は高麗大蔵経の研究を専門とする著者が、特に琉球の仏教との関係を論じたものである。この中に、朝鮮から琉球に送られた仏典についての言及があり参考になる。それは次のようなものである。

ここで注目されるのは、大蔵経以外に『金剛経』『法華経』『般若心経』『大悲心経』『楞嚴経』『円覚経』などの經典類と『楞伽経疏』『阿弥陀経疏』『維摩経宗要』『観無量寿義記』『金剛経五家解』などの章疏類が贈られていることである。この典籍類は、禪宗でも読まれているものであり、琉球での禪宗発展に何らかの関係があると考えられる。また、『阿弥陀経疏』や『観無量寿義記』などの浄土教典も含まれていることから、浄土信仰もあったと推測される。『楞伽経疏』『阿弥陀経疏』『維摩経宗要』『観無量寿義記』などは元暁の著書と思われ、これらが『新編諸宗教蔵総録』に収録されており、大蔵経以外にもこうした經典類が贈られていたことは興味深い。（馬場〔2014：203〕）

ここで馬場は、送られた典籍の性格として三点を指摘している。第一に禅宗で読まれているものであるから、琉球での禅宗発展と関係があるのではないかということ、第二に浄土教典も含まれていることから、浄土信仰もあったと推測されること。第三に新羅時代の元暁の著書と考えられるものが含まれていることである。

本研究は、上の馬場の指摘を参考にしながら、送られた仏典を世祖の刊経事業との関連で調査することにより、その性格と意味を明らかにしたい。

世祖代の刊経事業に関する先行研究としては、パク・チョンスク [1996] の「世祖代 刊経都監の設置と仏典刊行」がある。そのほかチョン・ヘボン [1991] をはじめとする韓国の書誌学研究成果⁶も参考にした。

3. 世祖の仏典刊行事業

3-1 世祖の仏教政策

まず世祖について簡単に紹介する。世祖は、朝鮮王朝第4代の国王でハングルの原形である訓民正音を創制した世宗（在位：1418-1450）の次男として誕生し、即位前は首陽大君という名であった。世宗が亡くなった後、その後を継いだ第5代国王・文宗は病弱で即位後2年で亡くなった。第6代国王・端宗は12歳とまだ幼かった。そこで文宗は亡くなる前に、端宗のことを三政丞の皇甫仁、金宗瑞に依頼した。この状況に首陽大君は満足できず宮中で力を伸ばし始める。それに対して皇甫仁、金宗瑞らは世宗の三男・安平大君と手を組み対抗した。ついに首陽大君はクーデターを起こし、皇甫仁、金宗瑞らを殺害、安平大君を江華島に島流しにした。続いて端宗が譲位するように首陽大君の腹心であった韓明澮らが圧力をかけ、ついに端宗は譲位し1455年（景泰6）首陽大君が第7代国王・世祖になった。

国王になっても世祖の周囲は安定しなかった。まず世宗が作った集賢殿

の学者であった成三問、朴彭年らがクーデターを企てたが発覚した。成三問らは拷問に対して謝罪をせず、世祖を王子の時代の呼び名である首陽大君と呼び続け、ついには処刑された。これが端宗復位事件である。この時に殺された六人の臣下を死六臣という。さらにその翌年にも、世祖の弟・錦城大君を中心とする端宗復位計画があったが、これも事前に発覚し、世祖は錦城大君を賜死させた。そして端宗をも賜死させた。

こうした血生臭い権力闘争を繰り広げた世祖であるが、同時に篤い仏教信者でもあり朝鮮時代最大の奉仏王であった。彼の王子の時代の代表的な事業としては、世宗に命じられて編纂した『釈譜詳節』の刊行がある。これは釈迦如来の前生因縁から入滅・舍利塔建立に至る一代記を諸經典から採録し、また中国梁代の僧祐『釈迦譜』、唐代の道宣の『釈迦氏譜』を参考にしながらハングルの原形（正音）で翻訳採録したものである。

世祖は即位後にも様々な仏事を行った。第一には、内院寺、海印寺などに奴婢その他を寄進したほか、五台山月精寺などの中興祖となった。ほかにも金剛山乾鳳寺や表訓寺などを重修したり、鐘を寄進したりした。第二には仏典刊行事業である。これは時期別に四つに分けられる。

第一は1457年（天順1）に行った仏典刊行である。これは夭折した王世子の追悼のためであった。そこでは大藏經のほか13種の仏典を刊行した。すなわち、大藏經と『華嚴經』を各1件、その他『法華經』、『楞嚴經』、『翻訳名義集』各100件、『地藏經』、『懺法』を各4件印出して諸方大衆に与え、また能書者に命じて『法華經』、『地藏經』、『起信論』、『梵網經』、『行願品』各1件を墨書させ、『金剛經五家解』に涵虚（己和）の『金剛經説誼』を加えて一書となし、また『永嘉集』の諸異本を校訂し、涵虚の『永嘉集説誼』を『永嘉集』に入れ、また『証道歌』の彦琪註、宏徳註、祖庭註を集めて一書とし、活字を作って100件を印出させた⁷。

第二に1458年（天順2）に行った高麗大藏經を五十部、印出したことである⁸。これは海印寺の高麗大藏經を、たびたび日本に贈り数が少なくなっ

のために増刷して名山福地に置いた。その目的は、上は先王などの霊のために、下は法界含霊の全てのもののためである。

第三は1459年（天順3）に『月印釈譜』を刊行したことである。これは世祖が王子の時代に刊行した『釈譜詳節』と『月印千江之曲』を合わせたものである。『月印千江之曲』とは世祖が父・世宗に『釈譜詳節』を献呈した際、世祖がその内容をさらに重頌したものである⁹。

第四が1461年（天順5）の刊経都監の設置である。パク・チョンスク[1996: 39]によれば、刊経都監の機能は四つあったという。第一は仏典の刊行、第二は水陸齋などの仏教儀礼の主管、第三は各種仏事の設行と執行、第四は書物の輸入である。このように世祖が設けた刊経都監は仏典の刊行だけに止まらず、全仏教を掌握する役割を担ったという。この中、仏典刊行は、義天の統蔵經の重修を中心とする漢文仏典と、ハングル訳である諺解本の刊行を行なった。漢文仏書は、世祖代の刊行が確実なものが30種、世祖代のものと推定されるものが8種ある¹⁰。続いて諺解仏書の刊行は8種類であり¹¹、『楞嚴經諺解』、『法華經諺解』、『禪宗永嘉集諺解』、『金剛經諺解』、『阿弥陀經諺解』、『般若心經諺解』、『円覚經諺解』、『蒙山和尚法語諺解』である。

以上の世祖代の仏典刊行を年表形式にまとめると＜表1＞のようになる。ここには次に検討する海外への仏典の送付も入れた。

4. 世祖が朝鮮が琉球に送った仏典

4-1 世祖による海外への仏典送付

世祖は日本や琉球に大蔵經のほかにも数多くの典籍を送った。多くは仏典であるが、中には『道德經』（『老子』）や『高世帖』、『真草千字文』、『八景詩帖』、『浣花流水帖』、『東西銘』、『赤壁賦』、『蘭亭記』、『王右軍蘭亭記』

<表 1>世祖の仏典刊行・流通に関する年表

西暦	元号	世祖	事 項
1455	景泰 6	1	即位
1457	天順 1	3	王世子死去。大藏經、『華嚴經』を各 1 件、『法華經』、『楞嚴經』、『翻訳名義集』を各100件、『地藏經』、『懺法』を各 4 件、『法華經』、『地藏經』、『起信論』、『梵網經』、『行願品』、『金剛經五家解』、『永嘉集』、『証道歌』を刊行
1458	天順 2	4	高麗大藏經を50部印出
1459	天順 3	5	『月印釈譜』を増編刊行 * 日本に13種の仏典送る
1460	天順 4	6	* 日本に 9 種の仏典送る
1461	天順 5	7	刊経都監を設置 『金剛般若経開玄鈔』、『涅槃経義記円旨鈔』、『四分律行事鈔詳集記』重刊 * 対馬に12種の仏典送る
1462	天順 6	8	国訳『楞嚴經』刊行、『大日経演密鈔』、『起信論筆削記』、『華嚴経合論』、『瑜伽論疏』、『楞嚴経義海』、『真実珠集』、『五杉練若新学備用』、『法華経普門品三玄円賛科文』、『涅槃経疏』、『浄名経関中疏』、『円覚礼懺略本』、『大乘阿毘達磨雜集論疏』、『地藏菩薩本願経疏』、『俱舍論頌疏鈔』を刊行 * 琉球に17種（1月1日）、19種（1月16日）の仏典送る
1463	天順 7	9	国訳『法華經』、『廬山集』を刊行
1464	天順 8	10	・ 円覚寺建立 ・ 国訳『阿弥陀経』、国訳『永嘉集』、国訳『金剛經』、国訳『般若心経略疏』刊行、『円覚經』、『菩提達磨四行論』、『四教儀集解』を刊行
1465	成化 1	11	国訳『円覚經』刊行
1466	成化 2	12	『慈愛和尚広録』刊行
1467	成化 3	13	国訳『牧牛子修心訣』、国訳『四法語』、国訳『蒙山和尚法語略録』刊行 * 琉球に27種の仏典送る（8月14日、17日）
1468	成化 4	14	『円宗文類集解』、『林間録』刊行

（参考文献）『朝鮮王朝実録』，チョン ヘボン [1991]，バク チョンスク [1996]

といった書もある。この中、仏典に着目すると、海外に7回送っている。送付地域と回数は、日本（2回）、対馬（1回）、琉球（4回）である。次の<表 2>は『朝鮮王朝実録』をもとに、1459年から1467年まで世祖が海

<表 2> 世祖が海外に送った仏典

	1	2	3	4	5	6	7
年号（西暦）	1459	1460	1461	1462		1467	
年号（中国）	天順3	天順4	天順5	天順6		成化3	
世祖年	5	6	7	8		13	
月・日	8.23	9.27	4.22	1.10	1.16	8.14	8.17
送付先	日本	日本	対馬	琉球	琉球	琉球	琉球
典籍数	13	9	12	17	19	27	27
1 『成道記』	○	○	○	○	○	○	○
2 『法華経』	○	○	○	○	○	○	○
3 『金剛経』	○	○	○	○	○	—	—
4 『金剛経十七家解』	○	—	—	—	—	—	—
5 『金剛経五家解』	—	—	—	—	○	○	○
6 『金剛経治父宗鏡』	—	—	—	—	—	○	○
7 『心経』	○	○	○	○	○	○	○
8 『維摩詰経』	—	—	—	—	—	○	○
9 『維摩経宗要』	—	—	—	○	○	○	○
10 『円覚経』	○	—	○	○	○	○	○
11 『涵虚堂円覚経』	—	—	—	—	—	○	○
12 『楞嚴経』	○	—	○	○	○	○	—
13 『楞嚴義海』	—	—	—	—	—	○	○
14 『楞嚴会解』	—	—	—	—	—	○	○
15 『永嘉集』	○	○	○	○	○	○	○
16 『証道歌』	○	○	○	○	○	○	○
17 『碧巖録』	—	—	—	—	—	○	○
18 『高峯和尚禅要』	○	—	—	—	—	○	○
19 『真实珠集』	—	—	—	—	—	○	○
20 『楞伽経』	—	—	—	—	—	—	○
21 『楞伽経疏』	—	—	—	○	○	○	○
22 『阿弥陀経疏』	—	—	—	○	○	○	○
23 『観無量寿経義記』	—	—	—	○	○	○	○
24 『大悲心経』	—	○	○	○	○	○	○
25 『四教儀』	—	—	○	○	○	○	○
26 『起信論』	○	○	○	○	○	○	—
27 『法鏡論』	—	—	—	○	—	○	○
28 『法経論』	—	—	—	—	○	—	—
29 『翻訳名義』	○	○	○	○	○	○	○
30 『法数』	—	—	—	—	—	○	○
31 『水陸文』	—	—	—	—	—	○	○
32 『宗鏡録』	—	—	—	—	○	—	—
33 『地藏経』	○	—	—	—	—	—	—

外に送った仏典を整理したものである。なお，典籍名は原典に記載されたまゝを記し，配列は原典の記載順ではなく内容から類似したものをまとめて筆者が配列した。

これを見ると，7 回の海外への仏典送付のうち，1467 年に琉球に送った数が一番多いことがわかる。この中，沖縄にだけ送った書物のうち，1462 年以後に見える書物は 6 種類で，『維摩經宗要』，『楞伽經疏』，『阿弥陀經疏』，『観無量寿經義記』，『法鏡論』，『法經論』である。さらに 1467 年以後に見える書物は 11 種類で，『金剛經治父宗鏡』，『維摩詰經』，『涵虛堂円覚經』，『楞嚴会解』，『楞嚴義海』，『碧巖録』，『高峯和尚禪要』，『真実珠集』，『楞伽經』，『法数』，『水陸文』である。これらの意味については後に検討することにして，まず海外に送られた仏典の内容などを確認する。

4-2 世宗が送った仏典

ここでは世宗が海外に送った仏典について，送付回数，簡単な内容解説，世祖代の仏書刊行との関連について整理する。解説は主として東国大学校仏教文化研究所『韓国仏書解題辞典』，イ・チグァン『韓国仏教所依經典の研究』，『仏書解説大辞典』，『禪学大辞典』などによった。なお解説中で用いる刊本の略号は次の通りである。ㄱ統藏=ㄱ統藏經，大正藏=大正新修大藏經，韓仏全=韓国仏教全書

1 『成道記』

世祖が海外に送った仏典の中，7 回中，7 回すべてに送っている。『釈迦如来成道記』は唐代の詩人・王勃（650-676）の作である。内容は釈迦の生涯を記述した仏伝である。唐代，中国杭州南方にある錢塘江にある月輪山の道誠が注釈を作った。刊本はㄱ統藏經 1-2-3 に収録されている。

『釈迦如来成道記』に関する記録は，『朝鮮王朝実録』には 9 件の記録があり，いずれも世祖代である。韓国に現存する版本は，1655 年（孝宗 6）

に智異山燕谷寺で木版本として刊行したものであり、プサンの仙光寺に所蔵されている。これはプサン広域市有形文化財第108号に指定されている。

ただ疑問なのが、仏伝であれば世祖自身が編纂した『月印釈譜』があり、これを海外に送ってもよいと思われるのに、送っていないことである。

2 『法華経』

世祖が海外に送った仏典の中、7回中、7回すべてに送っている。『法華経』は鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』であり、東アジアに広く流布した經典である。刊本では大正蔵経9巻に収録されている。朝鮮王朝でも『法華経』が重視されたが、中でも世祖は、1457年（天順1）に王世子の供養のために『法華経』を100件刊行したほか、刊経都監で1463年（天順7）に国訳（諺解）を行った。これは鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』に対して宋の溫陵戒環（12世紀）の要解を訳したものである¹²。ちなみにこの戒環の注釈は朝鮮半島では重視され、『楞嚴経』の国訳（諺解）も戒環の注釈を基盤にしている。

3 『金剛経』

世祖が海外に送った仏典の中、7回中、最初の5回送っている。『金剛経』は鳩摩羅什が翻訳した代表的な大乘經典である。中国禪の第六祖とされる慧能が、この經典の中の「応無所住、而生其心」の部分で悟りを得たと伝えられることから禪宗で重視された。朝鮮半島でも研究され、朝鮮時代には後述する己和の注釈がある。世祖は『金剛経』を重視し、1464年（天順8）には国訳を刊行している。これは『金剛経』本文に、慧能の注釈を加えて翻訳したものである¹³。

4 『金剛経十七家解』

世祖が海外に送った仏典の中、7回中、1回目だけに送っている。『金剛経十七家解』は、中国宋代の揚圭の編。『金剛経集解』ともいう。刊本

は己統蔵 1-38-5 収録。『金剛經』に対する17人の解釈を収録したものである。17人は、五十三如来、晋の謝靈運、後秦の僧肇、劉蚪居士、作者不詳の一注、梁の傅大士、唐の慧能、宗密の序のある李唐の疏抄、宋の子栄、王日休、道川の頌、若訥、陳雄、顔丙、了性、僧微をいう¹⁴。世祖代の刊經との関連は不明。

5 『金剛經五家解』

世祖が海外に送った仏典の中、7 回中、5、6、7 回の 3 回送っている。本書は鳩摩羅什が翻訳した『金剛經』に対する五人の注釈書を集成したものである。五人とは、唐の宗密の纂要、梁の傅大士の賛、唐の慧能の口訣、宋の治父の頌、宋の宗鏡の提綱である。本書は誰が編纂したのかはわかっておらず、次に述べる涵虚得通己和以前には成立していたものと見られる¹⁵。

ちなみに本書と関連する『金剛經五家解説誼』は、己和が『金剛經五家解』の重要な部分を解釈した書物である。刊本は韓仏全 7 巻に収録されている。

己和は『金剛經五家解』を他の版本と比較して脱字、重複、誤字などを訂正し、他の書籍を参考できない場合には、意味の上から判断して正確な校訂本を作った。そして、經文の中、重要な部分や注釈が必要なところは集中的に注釈を行う方式をとった。

己和が注釈を加えたのは『金剛經』本文と、治父と宗鏡の著作に対してである。宗密・傅大士・慧能などの注釈に対しては、誤植の訂正に止まっている。このように部分的に説義を行ったのは己和の禅思想を反映しているためである。己和の著作目的は、『金剛經』に対する歴史的な流れを把握するようにし、仏教の本当の意味が日常生活に直結するものであることを明らかにしようとしたものであった。この本が著述された後には、朝鮮における『金剛經』流通が、この本により主導された。

1457年(天順1)には銅活字により、雲興寺で100部を印刷したこともあつ

た。

6 『金剛經治父宗鏡』

世祖が海外に送った仏典の中、7回中、6, 7回目の2回送っている。『金剛經治父宗鏡』とは、書名から考えると『金剛經』に対する注釈の中、治父の頌、宗鏡の提綱をいうように思われるが、この書名での典籍は存在しない。しかし内容から推測すると『金剛經三家解』（三家解諺解）の可能性が考えられる。これは涵虚得通己和の『金剛經五家説誼』巻中から、治父頌、宗鏡提綱、涵虚説誼を選び正音で翻訳したものである。巻末の跋文によれば草稿はすでに世宗在位時に文宗と首陽大君（後の世祖）により完成してあったが、校定をすましていなかったものを、成宗代に世宗の妃である慈聖大王大妃の命で学祖が校定を完成させて1482年に300部印出したという¹⁶。これを参考にすれば、琉球に送った『金剛經治父宗鏡』は完成前の『金剛經三家解』であった可能性がある。

7 『心經』

世祖が海外に送った仏典の中、7回中、7回すべてに送っている。『心經』は『般若心經』を指すと思われる。『般若心經』は代表的な大乘經典である。玄奘訳。刊本は大正蔵8巻に収録される。世祖との関連では、1464年（天順8年）に国訳『般若心經略疏』を刊行している。これは、唐の法蔵の『般若波羅蜜多心經略解』に対して宋代の仲希が重訳した『般若心經疏顕正記并序』を諺訳したものである¹⁷。

8 『維摩詰經』

世祖が海外に送った仏典の中、7回中、6, 7回目の2回送っている。『維摩詰經』は代表的な大乘經典の一つである。鳩摩羅什訳。刊本は大正蔵14巻に収録される。世祖の刊經との関連は不明である。

9 『維摩經宗要』

世祖が海外に送った仏典の中，4 回目から 7 回目までの 4 回送っている。『維摩經宗要』は鳩摩羅什訳『維摩經』に対する注釈書で，新羅元曉（617-686）の著作であるが現存しない¹⁸。世祖代の刊経との関連は不明である。

10 『円覚経』

世祖が海外に送った仏典の中，2 回目を除き 6 回送っている。『円覚経』は具名を『大方広円覚修多羅了義経』といい東アジアに広く流布した經典である。佛陀多羅訳とあるが，中国で作られた經典である。刊本は大正蔵経17巻に収録されている。内容は，本来清浄明徹な大円覚心を実証具現するためには，上中下の三つの機根に依じて，奢摩他，三摩鉢提，禪那の三種の淨觀を修習すべきことを説いている。

世祖は，1464年（天順8）に刊経都監から『円覚経』を刊行し，翌年の1465年（天順9）には宗密の『円覚大疏』に対して世祖が口訳を付けたものを刊行した¹⁹。

11 『涵虛堂円覚経』

世祖が海外に送った仏典の中，6，7 回目の 2 回送っている。これは涵虛得通己和による『円覚経』に対する注釈である。刊本は『大方広円覚修多羅了義経説誼』という題目で韓仏全 7 巻に収録されている²⁰。

12 『楞嚴経』

世祖が海外に送った仏典の中，2 回目，7 回目を除き 5 回送っている。『楞嚴経』は東アジアで流布した大乘經典の一つである。唐代に般刺蜜帝等が翻訳したとされるが，実際は中国で造られた經典という見方が主流である。刊本は大正蔵19巻に収録されている。

世祖は『楞嚴経』を重要視した。世祖代に刊行された『楞嚴経』は全20

種、1461年（天順5）乙亥字という活字で刊行された11種と、1462年（天順6）に刊経都監で刊行された9種がある²¹。刊経都監で刊行された国訳（諺解）本は、『楞嚴經』に対する宋代の溫陵戒環（12世紀）の要解を基本にしたものである²²。

13『楞嚴義海』

世祖が海外に送った仏典の中、6、7回目の2回送っている。本書は『楞嚴經』に対する宋の威輝の注釈である。刊本は正統蔵33-8、9に収録される。世祖代の刊経事業との関係は不明である。ただ、次に触れる『楞嚴会解』が世祖代にそのまま活字印刷されたことを考えると、これも同じく刊行されていた可能性がある。

14『楞嚴会解』

世祖が海外に送った仏典の中、6、7回目の2回送っている。『楞嚴經』に対する元の惟則の注釈書である。成立は1342年。刊本は正統蔵1-19-3-5に収録される。李智冠によれば、韓国に伝来する乙亥字本は、この惟則の会解をそのまま活字印刷したものであるといい、刊行年次はないが、諸事情を勘案して世祖の次の成宗年間（1470-1494）と推測している²³。

15『永嘉集』

世祖が海外に送った仏典の中、7回中、7回すべてに送っている。『永嘉集』は中国唐代の永嘉玄覺（?-713）が著わした書物であり、禪宗文献である。刊本は大正蔵48巻に収録される。本書は六祖慧能を嗣いだ永嘉玄覺が、修禪の根本精神と順序次第等を説いたものであり、「永嘉禪集」とも言う。慕道志儀第一より発願文第十に至る十章より成るが、第四、第五の両章に止観の行相を説き、第九章に佐溪玄朗との往復書簡を載せ、天台の円旨と、南宗祖師禪との巧みな融和を示す。本書は、高麗の諦観が喜び迎えたと伝え、注釈書に、宋の行靖の傍注、明の幽溪伝灯の注等がある。

世祖との関連では、1457年（天順1）に王世子の冥福を祈って刊行した典籍の中に『永嘉集』がある。世祖は『永嘉集』の諸異本を校訂し、涵虚の『永嘉集説誼』を『永嘉集』に入れさせた。1464年（天順8）には刊経都監から国訳本が刊行された。その内容は、『永嘉集』本文に宋代の石壁行靖が註し、晋水浄源が科門を修定し、これを韓国語訳（諺解）したものである。巻首には黄守身の進禪宗永嘉集箋があり、巻末には涵虚堂得通（己和）の序と涵虚堂説誼を一緒にしてある²⁴。

16『証道歌』

世祖が海外に送った仏典の中、7回中、7回すべてに送っている。『証道歌』は、中国唐代の永嘉玄覺（?-713）が著わした書物であり、禪宗文献である。刊本は大正蔵48巻に収録される。内容は、永嘉玄覺が六祖慧能に参じて大悟した無上道の要旨を、1814字247句の古詩体で歌唱したものである。

世祖との関連では、1457年（天順1）に王世子の冥福を祈って刊行した典籍の中に『証道歌』がある。そこでは『証道歌』の彦琪註、宏徳註、祖庭註を集めて一書とし、活字を作って100件を印出させた。

ちなみに世祖没後に刊行されたものに『永嘉大師証道歌南明泉禪師継頌』がある。これは、永嘉大師の証道歌を宋の南明泉禪師が継頌した320編を諺解したものである。これはまず世宗が30余首を親訳し、その訳の完成と『釈譜詳節』からの編入を世祖に命じたところ、諺解の慎重を期するために遅れ、完成を見ずに世祖が崩御したために、15年後の1482年に世宗の妃の命で学祖が続訳して500部を印出したものであるという。これはソウル大学などに収蔵される²⁵。

17『碧巖錄』

世祖が海外に送った仏典の中、6、7回目の2回送っている。『碧巖錄』

は、中国宋代（1125年）に圓悟克勤によって編纂された禅宗文献である。雪竇重顕選の公案百則に、垂示、著語、評唱を加えたもので刊本は『仏果圓悟禅師碧巖録』という名で大正蔵48巻に収録されている。

世祖の刊経事業との関連は不明であるが、チョン・ヘボンによれば、いっどこで作られたか正確にはわからないが、15世紀中期ころに印出されたと考えられる仏典の中に『碧巖録』があるという²⁶。

18『高峯和尚禅要』

世祖が海外に送った仏典の中、1回中と6, 7回目の3回送っている。『高峯和尚禅要』は朝鮮時代に刊行された禅の書物の中でも多く刊行されたものの一つであるという。(黒田亮『朝鮮旧書考』)。著者は高峯(1238-1295)で元代の禅僧である。本書の朝鮮半島への伝来は1399年が最初である。本書は朝鮮時代に僧侶の養成課程の中、四集科で学ばれる科目の一つとなり、現在でも広く流通している²⁷。世祖との直接的な関係は不明である。

19『真実珠集』

世祖が海外に送った仏典の中、6, 7回目の2回送っている。『真実珠集』は、1274年に中国宋代の倪妙行が様々な禅師の銘、歌、心要、法語、詩、文などを集めて編纂した禅籍である。本書は現在、韓国にだけ伝来し、中国や日本には伝わっていない。

本書は世祖8年(1462)に刊経都監から刊行された。板刻が精巧であり印刷がきれいで状態も良好な方である。当時、進義副尉にいた黄伍信が書いた文字で板下本を作り、尹弼商、盧思愼、韓繼禧の校勘を経て刊行された。現在、大韓仏教天台宗の求印寺に所蔵されているものは世祖代の刊行によるもので、宝物第1014号に指定されている²⁸。

20 『楞伽經』

世祖が海外に送った仏典の中，7 回目だけ 1 回送っている。『楞伽經』は四訳あったとされるが，現存するのは四卷本（求那跋摩訳），十卷本（菩提流志訳），七卷本（実叉難陀訳）の三訳である。五法，八識，三性，二無我などの教理が説かれる。世祖代との刊経事業との関連は不明である。

21 『楞伽經疏』

世祖が海外に送った仏典の中，4 回目から 7 回目までの 4 回送っている。『楞伽經疏』は『楞伽經』の注釈書である。『楞伽經疏』と名づける書物は，『仏書解説大辞典』によれば 9 種類あるが²⁹，朝鮮仏教との関連を考えると『楞伽經』元暁の可能性が高いと思われる。元暁の『楞伽經』の注釈書には，『楞伽經疏』7 卷，『楞伽經料簡』1 卷，『楞伽經宗要』1 卷があるが，いずれも現存しない³⁰。世祖代の刊経との関連は不明である。

22 『阿弥陀經疏』

世祖が海外に送った仏典の中，4 回目から 7 回目までの 4 回送っている。『阿弥陀經疏』は鳩摩羅什訳の代表的な大乘經典の一つ『阿弥陀經』に対する注釈書である。ただ『阿弥陀經疏』という題名の典籍は 11 種ある³¹ため，具体的に何を指すのかが問題である。韓国関係では新羅元暁の『阿弥陀經疏』がある（大正蔵 37 卷）ため元暁の可能性も考えられる。ほかには中国天台宗の天台智顗の『阿弥陀經義記』（大正蔵 37 卷）の可能性も考えられる。その理由は，世祖が智顗の解釈に基づく国訳本を刊行しているからである。それは鳩摩羅什訳 仏説阿弥陀經 1 卷（大字）とこれに対する天台智者大詩説の註（双行小字）を掲げ，このうち經文だけを正音（中字）で訳解（注音・翻訳・夾註）してある。これは世祖の親訳であり 1464 年（天順 8）に刊経都監から刊行された³²。

23『観無量寿経義記』

世祖が海外に送った仏典の中、4回目から7回目までの4回送っている。『観無量寿経義記』は『観無量寿経』に対する注釈書である。同名の著作は浄影寺慧遠が著わしており、刊本は大正蔵37巻に収録される。世祖代の刊経との関連は不明である。

24『大悲心経』

世祖が海外に送った仏典の中、2回中から7回目までの6回送っている。具名は『千手千眼観世音菩薩広大円満無碍大悲心陀羅尼経』で、唐の伽梵達摩の訳である。刊本は大正蔵20巻に収録されている³³。この經典に説かれる陀羅尼は「大悲呪」、「大悲心陀羅尼」と呼ばれ、禪宗で現在でも読誦される。世祖代との関連は不明であるが、現存するものには1476年（成化12）の刊本がある³⁴。

25『四教儀』

世祖が海外に送った仏典の中、3回目から7回目までの5回送っている。具名を『天台四教儀』という。高麗時代の諦観（900-975）の著作である。内容は天台教学を整理したものであり、現在でも伝統仏教の入門書として読まれている。刊本は大正蔵46巻に収録される。現在、韓国には1089年海印寺重刻本、1315年祈福都監版が現存する。世祖との関連では、宋代の從義（1042-1091）の注釈である『四教儀集解』が1464年（天順8）刊経都監版（現在高麗大学校所蔵）に刊行されたという³⁵。

26『起信論』

世祖が海外に送った仏典の中、1回中から6回目までの6回送っている。具名は『大乘起信論』。インドの馬鳴作とされるが撰述者をめぐっては問題がある。漢訳には真諦訳と実叉難陀訳とが伝わるが、真諦訳が一般的に

用いられている。刊本は大正蔵32巻に収録されている。本書は東アジア仏教に大きな影響を与えた。韓国の仏教においても新羅時代には元暁を始め多くの注釈書が作られた。

世祖の刊経との関連では、忠清南道錦山郡の身安寺で造られた身安寺板は、世祖が1457年（天順1）に、夭折した徳宗の冥福を祈るために造ったものを二次的に刊行したものであるという。その御製跋文には「予為亡子，既成諸經，又以心經，切於常持起信論，文義險奧。幸得圭峯注解，命印局添，成広布。庶幾憑良縁，亡子，或得開眼，漸漸成就妙徳，不墮予今日之願，悲夫劫尽而心無尽，唯願仏天，哀摂受。」とある³⁶。この中に「幸得圭峯注解，命印局添，成広布」とあることから、『起信論』本文に宗密の注釈を付したものを刊行したことがわかる。

27『法鏡論』

世祖が海外に送った仏典の中，4回目から7回目までの3回送っている。これは懐の著作と考えられる。新羅の表貝『華嚴經文義要決問答』，見登『華嚴一乘成仏妙義』にだけ引用され，韓国仏教における地論学派の影響との関連が指摘されている³⁷。世祖代の刊経との関連は不明である。

28『法経論』

世祖が海外に送った仏典の中，5回目の1回だけ送っている。しかしこれがどのような典籍かは不明である。『法経論』に名称が近い仏典には，「寶髻菩薩四法経論一卷 後魏世菩提留支訳」（現存せず），『大乘四法経論広釈開決記』（大正蔵85巻）があるが，いずれも略称が『法経論』とは考えにくい。あるいは前項の『法鏡論』の「鏡」字の誤植の可能性もある。世祖代の刊経との関連は不明である。

29『翻訳名義』

世祖が海外に送った仏典の中、7回すべてに送っている。『翻訳名義』は正しくは『翻訳名義集』といい、中国宋代の法雲（1088-1158）が、仏教經典に見える梵語から漢訳された単語を類別に整理して解説した辞典である。内容は「十種通号」から「寺塔壇幢」まで64編に分けて約2千余りの単語を収録している。それぞれ由来と大まかな意味を述べ、一つずつ典拠を提示し、単語の意味を解説している。刊本は大正蔵54巻に収録されている。

世祖の刊経事業との関連では、1457年（天順1）に「翻訳名義、乃姑蘇法雲所撰、釈經之指南、世所不伝者也、出内蔵一帙、并印百件」（『永嘉真覺禪師証道歌註解』）と述べ、本書が經典解釈の指南であるが世には伝わらないものであるために内蔵から出して100件を印出したと述べている。

現在、韓国には世祖年間の刊行と考えられる『翻訳名義集』が伝わり、宝物1369号に指定されている（啓明大学校所蔵）。³⁸

30『法数』

世祖が海外に送った仏典の中、6回目と7回目の2回送っている。『法数』とは、仏教語の中、一心、二門、三大のように、数が付く用語を数別に編纂したものである。書名に『法数』が付く典籍には次の4種がある³⁸。

1. 可遂重『藏乘法数』：元代，1巻：沙門宏演編 報恩禪寺，恭愍4（1355）
2. 一如『大明三藏法数』：永樂年間（1403年-1424年）の刊行，全50巻。
3. 行深『賢首諸乘法数』，明代（1427年），11巻。
4. 円淨『教乘法数』明代，12巻。

この中のいずれであるかはわからないが、『賢首諸乘法数』の可能性が考えられる。その根拠は、韓国国立中央博物館に所蔵される『賢首諸乘法数』の中に世宗17年(1435)の刊本が存在するからである。

31『水陸文』

世祖が海外に送った仏典の中、6回目と7回目の2回送っている。『水陸文』とは水陸斎という仏教儀礼が記された書籍である。この水陸斎とは、水と陸地で迷う魂と餓鬼とを慰めるために仏法を講説して食べ物を施す仏教儀式で、水陸無遮平等齋儀、国行水陸大斎、水陸会、悲斎会、十王斎、神衆斎、宰釈斎とも言う。水陸斎の起源は、中国梁代の武帝が、仏心が厚く有住無住の孤魂らを広く救済することがきつての功德と思い、僧たちと相談した後自ら儀式文を作った。その儀式文によって西暦505年に金山寺で法事を行ったのが最初である。韓国で水陸斎が行われたのは高麗時代からである。光宗の970年(光宗21)に葛陽寺で開設された水陸道場がその最初の例である。その後、高麗の明宗(1171-1197年)、太宗(1401年)、文宗(1066年)、懷宗(1209年)に至るまで江華島を中心に奉行した歴史的記録が見られる。

では琉球に送られた『水陸文』は具体的にどのような典籍であるか。現在、韓国に伝わる水陸斎関係の文献には次の9種類がある⁴⁰。この中、世祖代に関連するものは志磐撰『法界聖凡水陸(勝)会修斎儀軌』である。現存する刊本は1573年の刊行であるが、巻末に1470年(成化4)に金守温の跋文があるからである。よってこれが琉球に送られた可能性が高いと考えられる。

32『宗鏡録』

世祖が海外に送った仏典の中、5回目の1回だけ送っている。『宗鏡録』は中国宋代の禅僧、永明延寿の著。961年に成立した。大乘教の経論60部、

インド・中国の聖賢300余家の著書、禅僧の語録・戒律書、俗書などを広く渉猟し、禅に融合させた大著。内容は、標宗章、問答章、引証章からなる。朝鮮半島には、10世紀に高麗の光宗が、延寿が住した呉越国に留学生を派遣したことから、この頃に伝来したものと考えられる。刊本としては高麗大藏經の補板に収録されているほか、大正蔵48巻に収録されている。世祖代の刊經との関連は不明である。

33 『地蔵經』

世祖が海外に送った仏典の中、1回目の1回だけ送っている。『地蔵經』という名称からは『地蔵菩薩本願經』、『地蔵十輪經』が考えられる。『地蔵菩薩本願經』は唐の実叉難陀訳。刊本は大正蔵13巻に収録される。内容は、地蔵菩薩が釈尊の付属を受け、弥勒の出世に至るまで六道の衆生を救護し引導することを説いている。続いて『地蔵十輪經』は具名を『大乘大集地蔵十輪經』といい、玄奘訳である。刊本は大正蔵13巻に収録される。内容は、前半では、仏が地蔵菩薩のために、十種の転輪王を比喻として、上求菩提下化衆生の十転法輪を説き、後半では、金剛菩薩を活躍させて二乗を貶め大乘菩薩を高調している。世祖代の刊經事業との関連では、1457年（天順1）に王世子の冥福を祈るために刊行された仏典の中の一つにあるが、どちらの經典であるかは判断できない。

4-3 仏典の性格

続いて、以上の仏典の性格について幾つかの観点から考察する。

（1）世祖の重視した典籍との関連

第一には、世祖が重視した典籍であるかどうかである。上で検討した33種類の海外に送付した仏典を、内容から7種類に区分すると＜表4＞のようになる。

<表 4>

類別（数）	典籍名
1. 仏伝（1）	『成道記』
2. 經典（11）	『法華經』，『金剛經』，『般若心經』，『円覚經』，『楞嚴經』，『阿弥陀經』，『楞伽經』，『大悲心經』，『維摩經』，『觀無量寿經』，『地藏經』
3. 注釈書（8）	『金剛經十七家解』，『金剛經五家解』，『金剛經治父宗鏡』，『涵虛堂円覚經』，『楞嚴会解』，『楞嚴義海』，『阿弥陀經疏』，『維摩經宗要』
4. 論（4）	『四教儀』，『起信論』，『法鏡論』，『法經論』
5. 禪宗文献（6）	『永嘉集』，『証道歌』，『真実珠集』，『碧巖錄』，『高峯和尚禪要』，『宗鏡録』
6. 儀礼書（1）	『水陸文』
7. 事彙関係（2）	『饌訳名義』，『法数』

第一には仏伝である『成道記』である。世祖の刊行事業とは関連しないが重視されていた。

第二には經典である。經典は11種あるが，この中，『法華經』，『金剛經』，『般若心經』，『円覚經』，『楞嚴經』，『阿弥陀經』の6種類の經典は，国訳本を作成したことからわかるように世祖が重要視していた經典である。

第三に注釈書は8種類あった。これを注釈対象である經典で整理すると『金剛經』，『円覚經』，『楞嚴經』，『阿弥陀經』，『維摩經』の5つとなる。この中，『維摩經宗要』を除いた7種類は世祖が重要視していた經典である。『維摩經宗要』は元暁のものと推測した。

第四に論は4種類あった。この中，『四教儀』と『起信論』は世祖が重要視していたものであった。

第五に禪宗文献は6種類である。この中，『永嘉集』と『証道歌』は世祖の父・世宗の段階から重要視されていた文献であり，『真実珠集』は世祖自身が刊行したものである。よって，これらも世祖が重要視した文献と見てよい。

第六に儀礼書である『水陸文』は，刊經都監が水陸会を修したこととの

関連が考えられる（パク・チョンスク [1996: 43]）。

第七に事彙関係である『翻訳名義』と『法数』のうち、『翻訳名義集』は王世子追悼の時から重要視されていたものである。

以上、33種類の仏典中、21種類は世祖が重視していたものであることを確認できた。

（2）世祖の仏教思想的側面

続いて、以上の典籍から読み取れる世祖の仏教思想を検討する。世祖自身は、自分は仏教を信仰しているものであり、特定の仏教思想や宗派を信仰しているという意識はなかったと思われる。ただ、世祖が活動していた15世紀後半の仏教の状況を知るために、思想的な側面から検討してみることも意味のあることと思う。ここでは簡単に三点を指摘したい。

第一には天台教学である。第一に『法華経』と『楞嚴経』の国訳が宋代の天台の流れをくむ戒環の註を中心としていること。第二に『四教儀集解』が宋代の天台の従義のものであることから、一つの思想の軸が天台教学、中でも宋代の天台教学であることがわかる。

第二には華嚴教学である。第一に『円覚経』、『起信論』が華嚴宗の宗密の注釈を用いたこと、第二に『般若心経』の注釈が法蔵の注釈をもとにしたものである。

第三には禅思想である。前に挙げた『永嘉集』、『証道歌』のほか、『碧巖録』、『高峯和尚禅要』、『真実珠集』などがそれにあたる。禅思想も、宋代の『碧巖録』や元代の『高峯和尚禅要』のように、宋代およびそれ以後のものが中心となっている。

さらに第四には、釈尊に対する信仰である。これは『成道記』に象徴される。世祖は『月印釈譜』を作成するなど、仏伝を重要視していたと考えられる。

（3）世祖の韓国仏教に対する認識

続いて韓国仏教に対する認識を挙げる。送付した仏典に登場する韓国仏教の人物は、時代順では新羅時代の元暁、高麗時代の諦観、朝鮮時代初期の涵虚得通己和である。元暁の著作として確実なのは『維摩經宗要』であり、『楞伽疏』、『阿弥陀經疏』は可能性であるが、たとえ一つでも元暁の著作が入っているのは重要である。元暁については、新羅以後では高麗時代の義天（1055-1101）が重視したが、それ以後、朝鮮時代まで注目されていない。ではなぜ元暁の著作がここに入っているのか。『維摩經宗要』が出てくるのは、世祖が刊經都監を設置した以後の1462年からである。ここからあくまでも推測であるが、刊經都監の中で仏典の調査をしていた中で元暁の『維摩經宗要』を発見したのではないだろうか。本来、世祖が元暁の様々な文献を目にしていたならば、『起信論疏』や『十門和諍論』などを挙げるはずだったと思うからである。

続いて諦観については、天台教学を重視したこともあろうが、やはり朝鮮半島出身の人物だから重視したということもあると思われる。最後に己和である。世祖は己和が作った『金剛經』、『円覚經』、『禪宗永嘉集』の注釈を使っていた。これらは世祖が重要視していた典籍である。ゆえに世祖が己和を重視していると同時に、逆に言えば世祖の仏教観が、己和の仏教観の中にあるともいえるかもしれない。

（4）琉球への送付の意味

最後に、1462年（17種と19種）と1467年（2回とも27種）に世祖が琉球に仏典を送った理由を推測する。

一番簡単かつ妥当な答えはタイミングである。すなわち、世祖の刊經事業が最も活発だった時代に使臣の往來をしたからである。もちろん世祖が受けての側の琉球も仏教受容に熱心なことを知っていたから送ったと考えられるが、それが成立する前提として世祖の刊經事業があったのである。

では日本や対馬には送らず、琉球だけに送った仏典の意味はどうであろ

うか。1462年（天順6）以後に見える書物は6種類で、『維摩經宗要』、『楞伽經疏』、『阿弥陀經疏』、『觀無量壽經義記』、『法鏡論』、『法經論』である。さらに1467年（成化3）以後に見える書物は11種類で、『金剛經治父宗鏡』、『維摩詰經』、『涵虛堂円覚經』、『楞嚴会解』、『楞嚴義海』、『真実珠集』、『碧巖録』、『楞伽經』、『法数』、『水陸文』である。とくに11種の書物が、それ以前とは数が大きく異なる原因である。

これらの典籍の刊行、送付の意味について、筆者は次のように推測する。これらの典籍は大きく四つに分けられる。

第一に、『法数』、『水陸文』である。これは通常の仏教思想の典籍とは異なる。『法数』は仏教を学習していく上で重要な書物であり、また『水陸文』は仏教儀礼で重要な書物だからである。可能性としては、世祖はこれらを琉球の仏教興隆を考えて送ったものかもしれない。

第二は、『楞嚴会解』、『楞嚴義海』の二つの『楞嚴經』注釈書である。これは前の14『楞嚴義海』で見たように『楞嚴經』を重視する世祖が、中国の注釈だけを刊行した可能性が考えられる。『楞嚴会解』も同様に考えられる。

第三は、『真実珠集』、『碧巖録』の禪宗文献である。『真実珠集』は刊經都監から刊行されたものであるから、琉球だけに送られた意味がわかる。『碧巖録』も場合によってはこの時期に刊行されていたのかもしれない。

第四は、『維摩經宗要』、『楞伽經疏』、『阿弥陀經疏』（智顗のものでないとして）、『觀無量壽經義記』、『法鏡論』（『法經論』）は、刊經都監の仏典調査の中で発見され刊行されたものではないかと考える。

5. 結語

以上、朝鮮王朝第七代の国王である世祖が琉球に送った仏典について、

世祖代の刊経事業との関連で検討してきた。内容を整理すると次のようになる。

第一に世祖の仏典刊行事業を整理した。それは大きく四つに分かれる。第一は1457年（天順1）に行った、王世子の追悼のための仏典刊行であり、そこでは大蔵経のほか13種の仏典を刊行した。第二に1458年（天順2）の高麗大蔵経の五十部印出である。第三は1459年（天順3）の『月印釈譜』の増編の刊行、第四が1461年（天順5）に設置した刊経都監による仏典刊行であり、そこでは義天の統蔵経の重修を中心とする漢文仏典と、ハングル訳である諺解本の刊行が行われた。

第二に世祖が海外に送った仏典の調査を行った。

第一に数では、1459年の日本向け（13種）、1460年の日本向け（9種）、1461年の対馬向け（12種）、1462年1月10日の琉球向け（17種）、同16日（19種）、1467年8月14日の琉球向け（27種）、同17日（27種）であった。この中、1467年の琉球向けの仏典が最多である。

第二に、海外に送った仏典を類別にまとめると、仏伝、經典、經典の注釈、論、禪宗文献、儀礼文献、辞書的文献の7種類に区分できた。

第三にそれらの仏典について世祖との関連を調査した。その結果、經典の多くは世祖が重視した經典であり、禪宗文献も多くは世祖が重視したものであることがわかった。よって、世祖の送付仏典は世祖の重視した典籍であることが確認できた。

第四に、その背後にある世祖の仏教思想は、天台教学、華嚴教学、禪思想、釈尊への思いであった。また韓国仏教では新羅時代の元曉、高麗時代の諦観、そして朝鮮時代の己和を重視していたことがわかった。

第五に琉球に27種の仏典を送った理由は、一つには双方に仏教を奉ずる王がいたこと。二つに刊経都監での刊行、さらには仏典調査の過程で発見された書籍を送付した可能性を指摘した。

では、こうした典籍は琉球の仏教界にどのような影響を与えたのであろ

うか。これは史料の制約もあり難しいが、課題として設定しておく必要はある。ちなみに世祖により進められた仏典刊行は、次の第8代の成宗代にも続けられたが、途中で刊経都監は廃止され、朝鮮時代の仏教は試練の時期に入ることになる。

<参考文献>

*ハングル文献については参照の便のため、最初に日本語での訳文を記し、カッコ内にハングル表記を行なった。

1. 一次文献

『朝鮮王朝実録』

2. 二次文献

2-1 著作

・日本語

池谷望子, 内田晶子, 高瀬恭子 [2005] 編『朝鮮王朝実録琉球史料集成』(榕樹書林)

江田俊雄 [1977]『朝鮮仏教史の研究』(国書刊行会)

河宇鳳ほか著, 赤嶺守監訳, 金東善 [2011] ほか訳『朝鮮と琉球—歴史の深淵を探る』(榕樹書林)

崔昌植 [2005]『敦煌本「楞嚴經」の研究』(山喜房佛書林)

椎名宏雄 [1993]『宋元版禅籍の研究』(大東出版社, 1993年)

高橋亨『李朝仏教』[1973] (国書刊行会, 1973年) 原著は1929年

田中健夫 [1975]『中世対外関係史』(東京大学出版会)

知名定寛 [2008]『琉球仏教史の研究』(榕樹書林)

東国大学校仏教文化研究所編 [1982]『韓国仏書解題辞典』(国書刊行会)

名幸芳章 [1968]『沖縄仏教史』(護国寺)

那覇市企画部文化振興課編 [1986]『歴代宝案 第1集抄』(那覇市役所)

・韓国語

李能和 [1918]『朝鮮仏教通史』(新文館)

イ・チグァン (李智冠) [1969]『韓国仏教所依經典研究』(社団法人国一法蔵) [이지관 『韓国仏教所依經典研究』(社団法人国一法蔵)]

仏教中央博物館学芸研究室 [2008]『仏教中央博物館 開館1周年記念特別展法』(仏教中央博物館学芸研究室) [불교중앙박물관 학예연구실 『불교중앙박물관 개관 1주년 기념특별전법』(불교중앙박물관 학예연구실)]

2-2 論文

・日本語

- 江田俊雄 [1977a] 「朝鮮版法華經疏について」(『朝鮮仏教史の研究』, 国書刊行会)
- 江田俊雄 [1977b] 「朝鮮版法華經異版考」(『朝鮮仏教史の研究』, 国書刊行会)
- 江田俊雄 [1977c] 「朝鮮語訳仏典に就いて」(『朝鮮仏教史の研究』, 国書刊行会)
- 金天鶴 [2010] 「『法鏡論』の思想的立場」(『地論思想の形成と変容』, 国書刊行会)
- 崔昌植 [1992] 「『楞嚴經』の韓国流伝について」(『印度学仏教学研究』41-1)
- 鄭成一 [2011] 「朝鮮と琉球の物流」(河宇鳳ほか著, 赤嶺守監訳, 金東善ほか訳『朝鮮と琉球—歴史の深淵を探索』榕樹書林)
- 馬場久幸 [2014] 「『高麗再雕大藏經』の日本流通と活用—琉球国を中心として—」(『石堂論叢』58 輯)

・韓国語

- イ・ウォンスン [1995] 「『歴代宝案』を通して見た朝鮮前期の朝琉関係—直接通交期を中心として」(『国史館論叢』65) [李元淳「『歴代宝案』을 통해서 본 朝鮮前期의 朝琉關係—直接通交期를 中心으로—」(『国史館論叢』65)]
- カン・ヒョンギョン, カン・チャンス [2011] 「朝鮮本《真実珠集》に関する文献学的考察」(『中国文学』67 輯) [姜賢敬・姜贊洙「朝鮮本《真実珠集》에 관한 문헌학적 고찰」(『中国文学』67 輯)]
- キム・スンホ [1993] 「趙明基 旧蔵本 証道歌註の著者について」(『書誌学報』10 号) [김승호「趙明基 旧蔵本 証道歌註의 著者에 대하여」(『서지학보』10 号)]
- クァク・ドンファ, カン・スンエ [2008] 「楞嚴經版本に関する書誌的研究」(『書誌学研究』39 輯) [郭東和, 姜順愛「楞嚴經版本에 관한 書誌的研究」(『書誌学研究』39 輯)]
- コ・イチチン [1987] 「涵虛の金剛經五家解説誼考」(『韓國撰述佛書の研究』, 民族社) [高翊晋「涵虛의 金剛經五家解説誼考」(『韓國撰述佛書의 研究』, 民族社)] 初出は仏教文化研究院『仏教学報』11, 1974
- チェ・ウンギュ [1993] 「活字本《阿弥陀經諺解》解題」(『書誌学報』10 号) [최은근「活字本《阿弥陀經諺解》解題」(『서지학보』10 号)]
- チョン・ヘボン [1991] 「朝鮮前期仏書版本」(『季刊書誌学報』5) [千恵鳳「朝鮮前期仏書版本」(『季刊서지학보』5)]
- ナム・グォンヒ [2015] 「天台・法華章疏の刊行と流通」(『書誌学研究』62 輯) [남권희「天台・法華章疏의 刊行과 流通」(『書誌学研究』62 輯)]
- パク・チョンスク [1996] 「世祖代刊經都監の設置と仏典刊行」(『歴史と世界』20) [박정숙「世祖代 刊經都監의 설치와 仏典 刊行」(『역사와 세계』20)]

・データベース

国史編纂委員会『朝鮮王朝実録』

注

- 1 田中健夫 [1975: 293]
- 2 インターネットサイト「目からウロコの琉球・沖縄史」
- 3 近年のものでは馬場 [2014] の研究がある。
- 4 鄭成一 [2011]
- 5 池谷望子, 内田晶子, 高瀬恭子 [2005]『朝鮮王朝実録琉球史料集成』は、『朝鮮王朝実録』の中から琉球史料だけを抽出し訳注を付したものであり朝鮮王朝と琉球との交流を知る上で欠かすことのできない力作である。この中に仏典に関する注もあるが、それは一般的な説明に止まり、世祖の事業との関連には触れていない。pp.134-136, pp.174-178
- 6 参考文献を参照していただきたい。
- 7 李能和 [1918: 686-690]「成永嘉集先王遺命」
- 8 李能和 [1918: 683-686]「印大藏經高僧督役」
- 9 韓国仏書解題辞典 [1982: 218-219]
- 10 パク・チョンスク [1996: 53-59]
- 11 パク・チョンスク [1996: 59-66]
- 12 韓国仏書解題辞典 [1982: 222], また江田俊雄 [1977a], 江田俊雄 [1977b]。
- 13 韓国仏書解題辞典 [1982: 224-225]
- 14 『仏書解説大辞典』3 巻, p.454
- 15 コ・イッチン [1987: 173-174]
- 16 韓国仏書解題辞典 [1982: 231]
- 17 韓国仏書解題辞典 [1982: 225-226]
- 18 韓国仏書解題辞典 [1982: 21-22]
- 19 イ・チグァン [1969]: 281, 韓国仏書解題辞典 [1982: 228]
- 20 韓国仏書解題辞典 [1982: 151]
- 21 クァクドンファ, カン・スンエ [2008: 266-269]
- 22 韓国仏書解題辞典 [1982: 221]
- 23 イ・チグァン [1969: 193]
- 24 韓国仏書解題辞典 [1982: 223-224]
- 25 韓国仏書解題辞典 [1982: 232]
- 26 チョン・ヘボン [1991: 24]
- 27 イ・チグァン [1969: 118-119]
- 28 カン・ヒョンギョン, カン・チャンス [2011]
- 29 『仏書解説大辞典』第 11 巻, p.257
- 30 韓国仏書解題辞典 [1982: 22]

- 31 『仏書解説大辞典』第 1 巻, pp.46-47
- 32 韓国仏書解題辞典 [1982: 226]
- 33 江田俊雄 [1977c: 330], 江田は不空訳と述べる。韓国仏書解題辞典 [1982: 369]
- 34 韓国仏書解題辞典 [1982: 369]
- 35 ナム・グォンヒ [2015: 12-22]
- 36 イ・チグァン [1969: 219]
- 37 金天鶴 [2010]
- 38 チョン・ヘボン [1991: 18] 註 4
- 39 法数書の歴史については林鳴宇「金沢文庫所蔵『天台諸乘法数』について」(『印度学佛教学研究』52(1), 2003 年) に詳しい。
- 40 1. 『水陸無遮平等齋儀撮用』撰者不明。刊本 13 種存。最古は 1514 年。2. 『水陸無遮平等齋儀榜集』撰者不明。刊本 1 種存。3. 『法界聖凡水陸(勝)会修齋儀軌』志磐撰。刊本 1 種存。1573 年。4. 『天地冥陽水陸齋儀』竹庵撰。刊本 4 種存。最古は 1642 年。5. 『天地冥陽水陸齋儀纂要』編者不明。刊本 9 種存。最古は 1562 年。6. 『天地冥陽水陸雜文』編者不明。刊本 7 種存。最古は 1496 年。7. 『天地冥陽水陸齋儀梵音刪補集』海東沙門智還撰。刊本 4 種存。最古は 1709 年。8. 『仔夔刪補集』清面河撰。刊本 5 種存。最古は 1568 年。9. 『仔夔文節次条例』釈聖能編。刊本 2 種存。最古は 1724 年。韓国仏書解題辞典 [1982: 350-354]